

パプアニューギニアにおける民族考古学的調査（一一一）

高橋龍三郎・大網信良・平原信崇・山崎太郎

はじめに

私たちがパプアニューギニアの民族誌調査を開始してからは、はや一四年が経った。縄文時代の社会、特に土器型式が成立する社会的背景を研究するに当って、模索の末に主に二つの地域を選択した。一つはパプアニューギニア本島の最東端にあるイーストケープ（ケヘララ地区、トパ地区）とワリ島である。この地域では広くエンジン・グループに包括されるイーストケープ伝統とワリ式土器が対象となった。他の一つはパプアニューギニア北東部の大河川であるセピック川中流域のクウォマ族とサウォス族の製作する土器である。それぞれ異なる地域における土着の素焼土器の生産の実態から、それを支える以下の二点の社会的背

景を探ることを企図したものである。

いずれの地域の土器も装飾性豊かで、器形や装飾において斉一性を持っており、一定の地理的分布をなしている。土器型式が成立する背景には土器を製作する人間集団の社会的側面が深く関わり、その点で親族組織の構造や婚姻システムが大きな要因となっている。

もう一つの側面は、土器の器形や文様装飾に含意される製作者のメッセージの意味内容についてであり、それについて社会的コンテキストをどう読み解くかという問題である。

両地域の土器については、一九六〇年代にメイとタクソンによる網羅的な研究がなされているものの、上記のような社会的コンテキストを説明する企画はなされておらず、当該分野の研究は筆者らが初めてである。

縄文土器の特徴である器形や文様装飾は、土器の容器としての機能とは全く別個に、そこに儀礼や祭祀を媒介にした集団の制度と製作者のメッセージが込められている。そのメッセージをどのように読み解くかが問われているわけである。多くの場合、文様などに込められるメッセージは秘匿されることが多く、容易に接近を許さないことがわかってきている。また土器型式の成立に必要な型式の要素（例えば器形、文様の内容、施文方法、文様帯）の斉一性がどのように齎され、地理的な分布を構成するメカニズムについても、実地の社会的観察が解明の扉を開くと期待されるのである。

私たちが実施する民族誌的調査は、まさに類似するコンテキストで成立するであろう縄文時代の土器型式の社会的基盤を、土器製作という行動学的な側面から追及するものである。

（高橋龍二郎）

1 二〇一四年度の調査概要

二〇一四年度の調査は、八月九日から二三日までの日程で、イーストセピック州のセピック川流域のミノ村 (Mino)、コイワット村 (Koiwat) において行った (図1)。セピック川は、全長一二六kmに及ぶ大河であり、イン

パプアニューギニアにおける民族考古学的調査 (一一二)

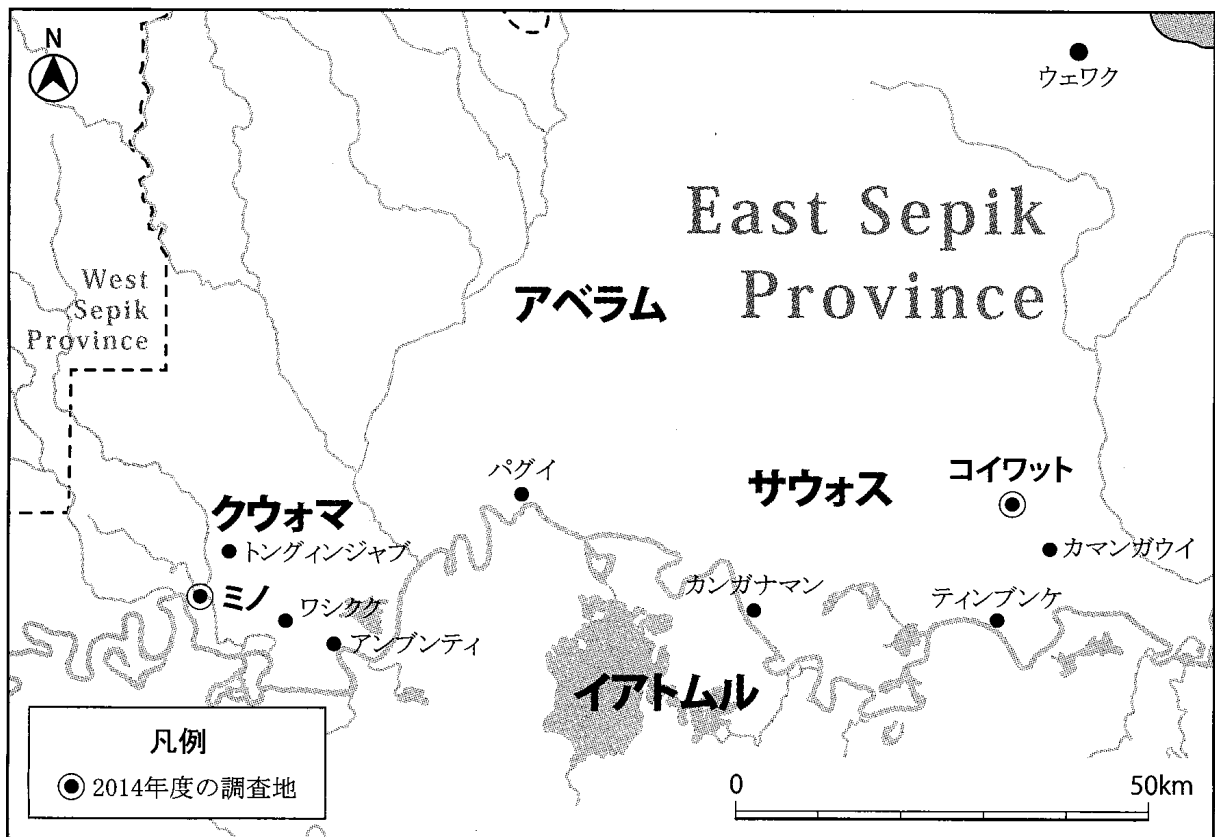


図1 イーストセピック州の地図

ドネシアとの国境近くから発し、広大な湿地帯の中央を蛇行してビスマルク海に流れ込む。本稿で報告するクウォマ族、サウォス族はこのセピック川上・中流域の北側に居住する。

我々は、二〇〇三、二〇一一年度にも当該流域を訪れており、クウォマ族やサウォス族、イアトムル族の村々において、社会組織、土器づくり、儀礼、ハウスタンバランなどについて調査を行った（高橋ほか二〇〇三、二〇一三）。二〇一四年度は、ミノ村での調査を継続し、土器づくりに関する聞き取りや土器の図化作業を行い、ヤム儀礼を実見する機会を得た。また、新たにサウォス族の土器づくりの調査を開始し、コイワット村において親族組織やハウスタンバランなどに関する聞き取り、土器の図化作業、土器製作工程の実見などを行った。なお、二〇一四年度の調査行程の詳細は、表1を参照されたい。

（山崎太郎）

表1 2014年度調査行程

調査日	調査地	調査内容
8月9日	-	成田国際空港 ⇒ ジャクソン国際空港（ポートモレスビー）
8月10日	-	ジャクソン国際空港 ⇒ ウェワク空港
8月11日	-	陸路・モーターカヌーにてウェワク⇒ アンブンティ
8月12日	ミノ	アウマルの製作実見（成形・整形） アパウの製作実見（成形・整形） 土器づくりに関する聞き取り 親族組織に関する聞き取り ハウスタンバランの見学
8月13日	ミノ	アウマルの製作実見（施文） アウマルに関する聞き取り 文様意匠に関する聞き取り
8月14日	ミノ	土器のデータ収集（実測・拓本・写真） 文様意匠に関する聞き取り
8月15日	ミノ	アウマルの製作実見（焼成・仕上げ） アパウの製作実見（焼成・彩色） アパウに関する聞き取り 文様意匠に関する聞き取り スピリットに関する聞き取り
8月16日	ミノ	シンシンを見学 ヤムの植え付けと収穫を見学 ヤム儀礼を見学
8月17日	-	陸路・モーターカヌーにてアンブンティ⇒ コイワット
8月18日	コイワット	クラン、ハウスタンバランに関する聞き取り 土器づくりに関する聞き取り 土器製作の実見（成形・整形・施文）
8月19日	コイワット	土器製作の実見（施文） 土器製作者の親族、経歴に関する聞き取り 土器のデータ収集（写真）
8月20日	コイワット	土器製作者の親族、経歴に関する聞き取り 土器のデータ収集（実測・拓本）
8月21日	コイワット	土器製作の実見（焼成・着色） 陸路にてコイワット⇒ ウェワク
8月22日	-	ウェワク空港⇒ ジャクソン国際空港
8月23日	-	ジャクソン国際空港 ⇒ 成田国際空港

2 クウォマ族ミノ村の調査

ミノ村はワシクク丘陵の西端に位置し、セピック川上流域の拠点であるアンブンティからモーター付きのカヌーで約二時間の距離にある。クウォマ族 (Kwoma)¹⁾ が居住する七つの村のなかで最も西にあたり、その北西には言語学的に同じ語族に属し文化的にも共通点が多いヌクマ族 (Nukuma)、セピック川の本流をさらに上流へと遡るとマヨ族 (Mayo) の居住域がある。

早稲田大学考古学研究室の調査隊がミノ村を訪れるのは、二〇〇三年、二〇一一年に次いで三度目になる。これまでの調査ではミノ村のほかにはワシクク村 (Waskuk)、トングインジャブ1村 (Tangunjamb No.1)、トングインジャブ3村で調査を行っており、土器づくりをはじめ親族組織、婚姻、ハウスタンバラン (hous tambaran)²⁾、儀礼組織、ヤム儀礼など複数の領域にまたがる知見を得た (高橋二〇〇四、高橋ほか二〇〇五、平原・岩井二〇一二)。伝統的な知識や製作技術が次世代へと継承されなかった村もあるなか、ミノ村ではとくに土器に関する知識や技術が保持されているため継続的に調査を実施している。

二〇一四年度のミノ村での調査は、八月十二日から十六

パプアニューギニアにおける民族考古学的調査 (一一一)

日の五日間にわたって実施した。ごく短い日数ではあったが、儀礼用の仮面土器アパウ (ap'au) に加え儀礼用の飲食具アウマル (amar) の製作を実見、それらにまつわる文様や精霊の聞き取り、後述するヤム儀礼とアウマルの使用コンテクストの記録、村内にあるオコンドル (Okondolu) という名のハウスタンバランの記録など、これまでの知見をさらに深めるとともに新たな知見が得られた調査であったといえる。

(1) 土器づくりの調査

紙幅の都合上、本節では新たな知見のひとつアウマルの製作工程とその聞き取り成果を中心に報告したい。

① 製作者

アウマルとアパウの製作を実演してくれたのはN氏 (五十歳代) である (図2)。N氏はミノ村出身の三兄弟の末弟であり、クラワクラン (Kulawa) に属す。ハムクワクラン (Hamkuwa) に属す妻がおり、十人もの子どもをもつ。セピック川流域の多くの部族と同様にクウォマ族は父系制であり、結婚後は夫方に居住する。例に違わず、N氏は婚出した娘をのぞき、妻子とともにミノ村で暮らしている。

N氏は、十八歳のころに父から製作技術を習ったとい

う。父は彼だけでなく二人の兄弟にもつくり方を教えたため、三人ともアパウを製作できるらしい。その一方で、今日のミノ村でアウマルを製作しているのは彼だけだという。これは、すでに土器を使用する儀礼が衰退してしまっていること、そして観光客に販売する目的でアパウがさかんに製作されていることと無関係ではないだろう。現にN氏は販売目的で、ときには製作を依頼されて年間二百から五百個体ものアパウを製作しているという。



図2 N氏と仕事場

次項にはいる前に、製作時のN氏の服装と製作場について付記しておきたい(図2)。N氏によれば、写真の服装は、祖先が儀礼やヘッドハンティングのときに着用していた伝統的な衣装であると同時に土器製作時の正装でもあるという。父も製作時に着用していたといい、N氏も普段から着用しているらしい。木彫が所狭しと置かれた製作場は、N氏が木彫や土器の製作時に普段から使用している場所だという。これは代々使用されている伝統的な建物ではなく、

アトリエのようなN氏個人の仕事場である。

②アウマルの製作工程

筆者らがミノ村に到着したときには、すでに下準備を済ませた黒色粘土が用意されていた。そのため、今次調査では粘土採取から素地づくりの工程を実見できていない。筆者らが見てきたのは、アウマル・アパウともに成形・整形から焼成を経て彩色の工程である。図3は共に今回の調査でN氏により製作され、調査隊に寄贈いただいたもので、1がアウマル、2がアパウである⁽³⁾。

成形・整形 細長い木槌で粘土をついてならしてから製作が開始された(図4-1)。N氏は利き手である右手をつかってほとんどの作業をおこない、左手を補助的につかっていた。成形技法は、粘土紐の巻き上げと輪積みを併用する紐づくり法である。一握りの粘土塊を凸状に湾曲する樹皮上で転がし、径約一〜二cm、長さ約二十〜三十cmの粘土紐をつくりだす(図4-2)。これを底部から巻き上げていくが(図4-3、4)、上胴部から口縁部にかけては一段ずつ輪積みで形づくっていた。これはおそらく水平な口縁を得るために輪積みが選択されたためと推測される。

整形技法は右手をつかうナデである。動作と機能が異なる次の三つの種類を認める。指先(親指または人差し

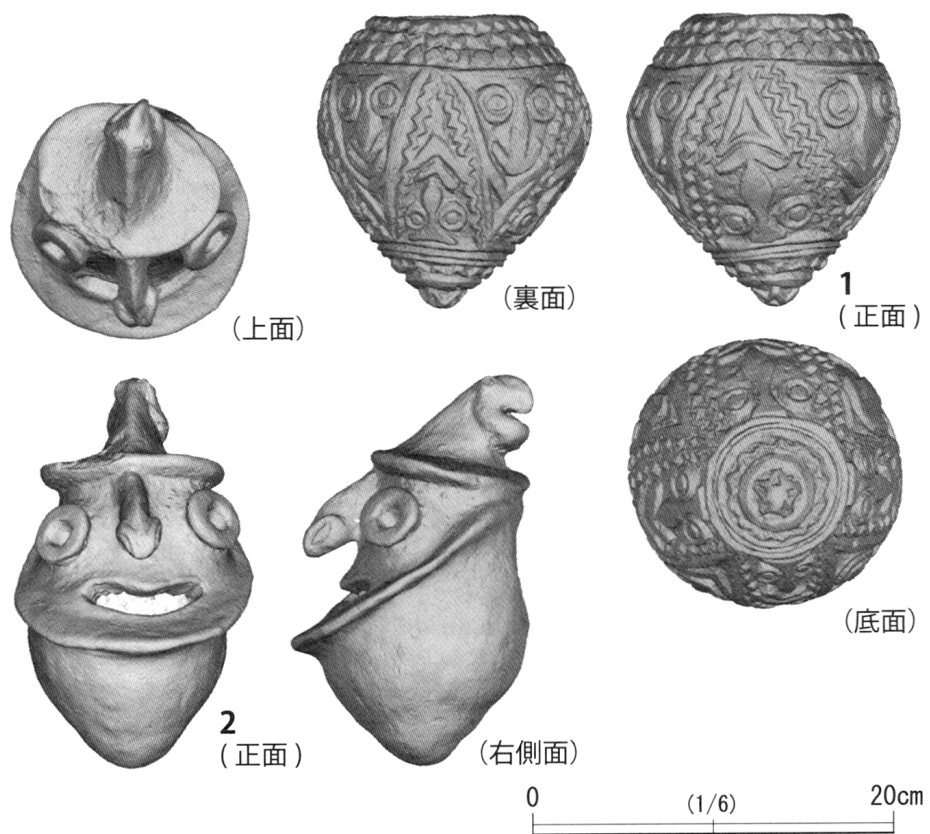


図3 今次調査で製作されたアウマルとアパウ

指)を垂直方向に動かすナデa(図4-5)、人指し指の腹面や側面を垂直・水平方向に動かすナデb(図4-6)、指を水に濡らしたうえでナデbをおこなうナデc(図4-7)、である。ナデaは粘土紐を積み上げるたびに、粘土どうしを接着させ接合痕を消去するための動作である。ナ

デbは数本の粘土紐を積み上げた後に、器面の凹凸を平滑にし、かつゆがみを調整するための動作である。ナデcは各部位の工程間や本工程の最後に仕上げとしておこなわれることが多い動作である。成形・整形は基本的には、粘土紐の巻き上げ・輪積み↓ナデa↓数本積みあがったらナデb↓仕上げにナデc、と規則的に進行する。

成形・整形後は直射日光下で三時間半ほど乾燥させてから仕事場へ土器を移動し(図4-8)、その翌日に施文が行われた。乾燥中に指でナデたり棒状工具で削ったりする光景も見られた。

施文 施文具は長さ約三十cm、幅約五cm、先端がゆるい三角形を呈する金属製ナイフである。ナイフをつかって文様を描く、というよりも木彫を製作するときのように器面を深く彫り込むことが特徴である。

文様は、区画文様と意匠文様とに大別でき、口縁部および底部を区画文様で画してから胴部全面に意匠文を施文する。まず口縁部から上胴部にかけて二本の区画沈線を彫り、それから沈線間に交互刺突を充填する(図4-9、図5-1)。次に下胴部から底部にかけて四本の区画沈線を彫り、口縁部と同様に沈線間と底部に交互刺突を充填する(図5-2)。沈線は二方向から彫り込むため、断面が鋭いV字形を呈する。



1. 木槌で粘土をつく



2. 樹皮上で粘土紐をつくりだす



3. 粘土紐を巻き上げて底部を成形



4. さらに巻き上げて胴部を成形



5. 粘土紐の接合痕を消す (ナデa)



6. 器壁のゆがみを調整する (ナデb)



7. 全面を平滑に仕上げる (ナデc)



8. 日向で乾燥させる



9. 区画文様を彫る



10. 意匠文様を割り付ける



11. 意匠文様を彫り込む



12. 野焼きの簡易な焼成施設



13. 5分ほどで全体に火がまわる

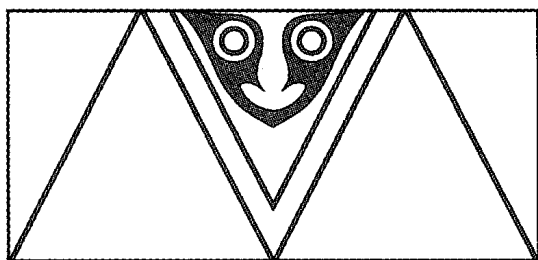


14. 黒色粘土水を全面に塗布する

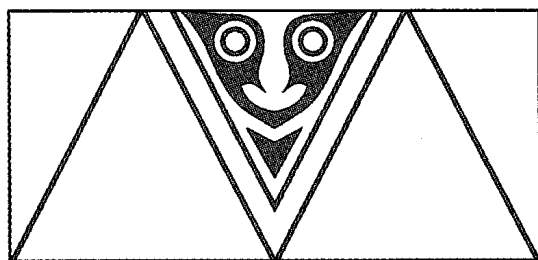


15. 白色液を全面に塗布する

図4 アウマルの製作工程



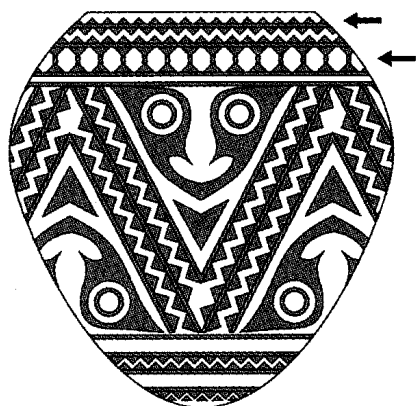
6. 鼻形の沈線を描き、それと円文の周囲を彫去



7. V字形の彫去



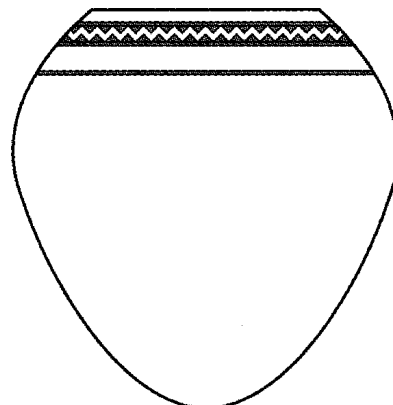
8. 鋸歯状文間に交互刺突を充填



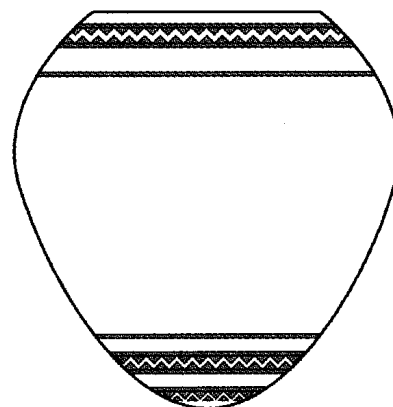
9. 口縁部の区画文様間に烈点文・多角形文を充填



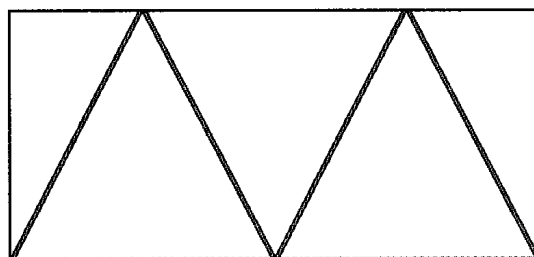
10. 底部の区画沈線間に沈線



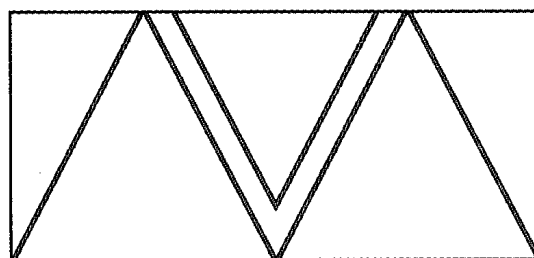
1. 上胴部から口縁部の区画文様



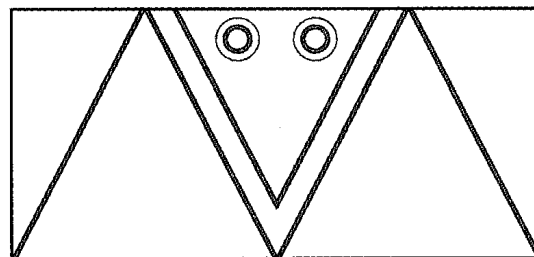
2. 下胴部から底部の区画文様



3. 鋸歯状文で主文様を割り付け



4. 平行する鋸歯状文



5. 2つの入れ子状の円文

図5 アウマルの施文工程(グレーは凹部)

口縁部と底部を区画文様によって画した後、胴部に意匠文様を施文する。まず、爪でおおよその割り付けを行っておき(図4-10)、鋸歯状の沈線で器面を分割し(図5-3)、それから反時計回りに三角形の区画の内側に意匠文様を充填していく(図4-11)。意匠文様は、鋸歯状文様に平行するよう沈線を沿わせる(図5-4)、二つの入れ子状の円文を彫る(図5-5)、円文間に錨形の沈線を彫ってからそれと円文の周囲を彫去する(図5-6)、その下にV字形の彫去を加える(図5-7)、平行沈線間に交互刺突を充填する(図5-8)、の順序で施文された。

意匠文をすべて施文し終えると、全体を見回して不足がないかチェックする。最終的には口縁部に烈点文と八角形の文様(対向する烈点文と縦位の短沈線の組み合わせ)を充填し(図5-9)、さらに底部の沈線間にもう一本の沈線を彫り込んで完了となった(図5-10)。

焼成 焼成は、施文の翌々日に仕事場の近くの開けた空き地で行われた。燃料はすべて自然素材で、サゴヤシの葉脈と樹皮、バンブー、ココヤシの葉、の四種類である。サゴヤシの葉脈でコ字形に区画し、その内部にそれ以外の燃料を敷き詰めて簡易な焼成施設をつくる(図4-12)。ココヤシの葉に点火して燃料の中へと挿入し、その上にサゴヤシの樹皮を敷いて土器をのせ、さらにその上をサゴヤシの

樹皮で覆う。点火から五分ほどで全体に火がまわり(図4-13)、二十分ほど経つとほとんどの燃料が燃焼してしまふ。燃え残った区画材のサゴヤシの葉脈を中央に寄せてさらに燃焼させ、点火から約三十分後に燃料が燃え尽きた灰の中から棒をつかって土器を取り出す。その状態のままさらに三十分ほどかけて自然冷却させ、手で持てるくらい冷めたところで仕事場の中へと移動し、そのまま彩色の工程へと進んだ。

彩色 彩色は、まず布をつかって黒色粘土を溶かした水を全面に塗布する(図4-14)。すぐに乾燥してマットな黒色を呈するが、その後に樹から採ったという白色液を、筆をつかって全面に塗布する(図4-15)。白色液は乾くと無色透明となり、ニスを塗布したような光沢を発する。

③アウマルの文様に関する聞き取り調査

アウマルの特徴のひとつは、全面に複雑な文様が施文されることである。その文様には、主に胴部に施文される意匠文様と、口縁部や底部に施文され胴部の施文域を区画する区画文様があり、区画文様は意匠文様に組み込まれることもある。N氏によればアウマルには約四十〜五十もの文様があるらしいが、これは区画文様と意匠文様を合わせた数であろう。

今次調査で収集したアウマルを例にとると、口縁部最上段に施文された三角形の刺突を横位に連続させる烈点文はグラングラン (*grangran*)、それを交互に対向させることによつて彫りだされた凸状の鋸歯状文はウエンジャ (*wenja*)、また烈点文を対向させてその間を縦位の短沈線で連結することによつて彫りだされた凸状の八角形の文様はウオングラム (*wongulamu*) という呼称がある (図6)。各文様には意味が付与されており、グラングランは「ミンジャ (*minja*) の舌」、ウエンジャは「波」、ウオングラムは儀礼組織イナマ (*yema-ma*) に特有の象徴的な文様であるという。

胴部に施文された意匠文様はイナ (*yena*) と呼称されており、同名の精霊イナや木彫品イナ像を想起させる (高橋ほか二〇一三)。それは二つの凸状の入れ子状の円文 (*milu*: 現地語で「目」の意)、凸状の錨形の文様 (*sumoinchi*: 現地語で「鼻」の意)、凹状のV字形の文様 (*kunja*: 現地語で「口」の意) で構成された顔面を表しており、それぞれウエンジャで区画される (図6)。イナの文様には五、六種類のヴァリエーションがあり、それぞれ異なるストーリー (神話的物語) が存在するらしい。

従前の調査では、精霊としてのイナやイナ像はクランや儀礼組織との帰属関係が明確であった。土器の文様も例外ではなく、イナマに属すN氏の「イナマに属すからイナの

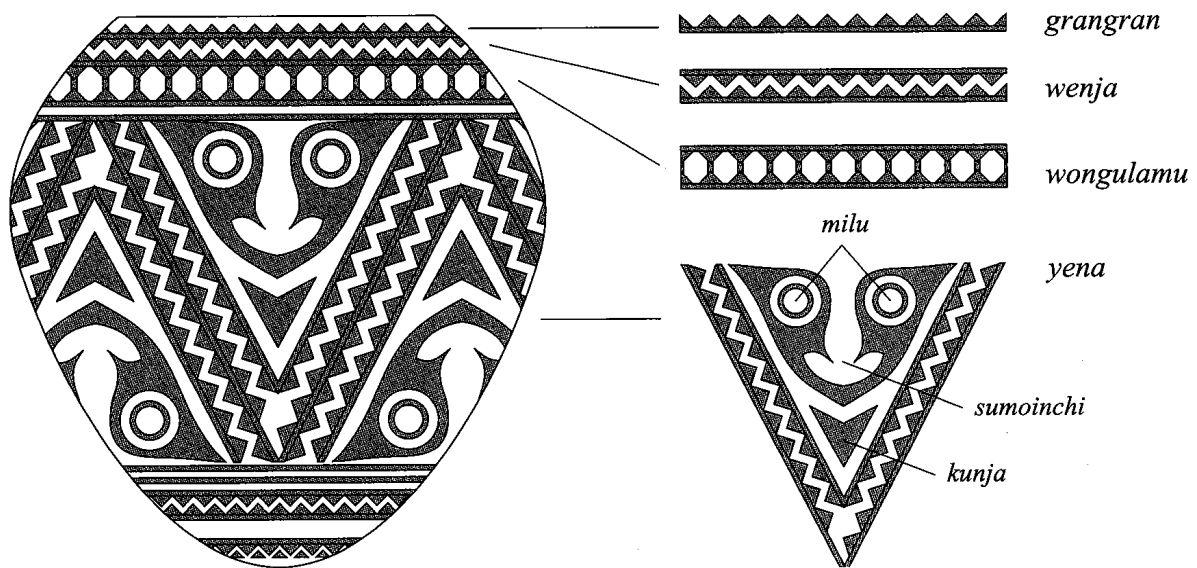


図6 アウマルの文様 (グレーは凹部)

顔を彫る」という発言やイナマに特有のウォングラムという文様の存在から、文様と儀礼組織との強い関連がうかがえる。もちろん帰属が明確ではない文様や重複する文様の存在も想定されるが、造形と同様に文様はクランや儀礼組織など複合的な帰属関係を表象していると考ええる。

(平原信崇)

(2) ミノ村のヤム儀礼について

ヤムイモはヤマノイモ科ヤマノイモ属に属する塊根植物で、パプアニューギニアに限らず熱帯圏の広い地域で栽培されている(堀田二〇〇三)。パプアニューギニアにおけるヤムは、タロイモ、サゴヤシと並ぶ重要な栽培植物であると同時に、さまざまな儀礼に使用され、社会的な性格が付与されていることが知られている(豊田一九九七)。二〇一一年度のクウォマ族の調査では、ヤム儀礼に関して「イナマ」「ミンジャマ」「ノクウイ」の三種の精霊に基づく儀礼集団が存在し、それぞれに特有の儀礼行為を有することが明らかとなった(高橋ほか二〇一三)。本調査では、ミノ村において、ヤムの植え付け・収穫と、儀礼行為としてのヤムスープの調理・共食、収穫に際したシンシンと呼ばれる歌や踊りについて実見する機会を得た。以下、それぞれの項目について記述する。

① ヤムの植え付け・収穫

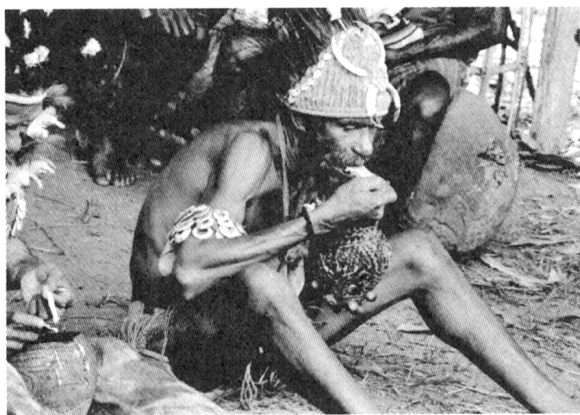
ヤムの植え付けは、種芋をヤムハウスから持ち出すことに始まる。ヤムハウスは平地式で、ヤムは地面に直接置かれており、いくつかの個体は発芽していた。ヤム畑には、焼畑により拓かれた急斜度の斜面が利用され、畑の所有者と異なる伝統的な衣装を着た五十歳代の男性が、堀棒や石斧を用いて地面を掘り起こし、種芋を植え付けた(図7-1)。ヤムは、現地において「頭」と称される茎の付いた頂部を斜面の上方に向けて置かれた。植え付け後は、先ほどの堀棒、石斧を用いて土が被せられた。

畑の斜面を下ったところに下草の茂った開地があり、その一角にヤムが栽培されていた。収穫者は植え付けの際と同じ男性であり、やはり伝統的な衣装を身に付けていた(図7-2)。男性は、十分に成長したヤムのまわりを掘棒で掘り起こして根の塊を取り出し、さらに石斧を用いてひげ根を切りながら分解して個々のヤムを取り出した。

② ヤム儀礼

次に収穫したヤムを用い、ハウスタン balan にてヤムスープを調理・共食する場面を実見した。

ヤムスープは、二人の男性によって調理された。その工程はまず、刃をつけた篋状の木器でヤムの皮を削ぎ、適度



4. ヤムスープを飲む男性



1. ヤムの植え付け



5. シンシンに使われる精霊像



2. ヤムの収穫



6. シンシンの様子



3. ヤムスープの調理

図7 ヤム儀礼の様子

な大きさに切り分けて、疎文の鉢形土器へ投入する。次に、ヤムで満たされた土器に竹筒から液体を注ぎ入れ、それを火にかける(図7-13)。加熱が進むとヤムから盛んにアクが出始め、その多くは吹きこぼれて土器外面に焦げついていた。調理者の男性は、加熱中は小割りした竹を用いて土器の中のアクを掻き出し、ヤムに十分に火が通ると押し潰してペースト状にする。大方ヤムの粒がなくなりスープ状になると、土器を火から下ろし、ココナツの果肉を加え、再度竹筒から液体を足して、ヤムスープが完成する。

完成したヤムスープは、ココナツの殻で五つのアウマルに移され、伝統的な衣装を

身に着けた壮年から中年期の五人の男性にそれぞれ振舞われた(図7-4)。男性たちは、ハウスタンバランスの庇の下に居並び、ココナッツの殻でスープを掬って飲んでいった。

③ シンシン

シンシンとは、一般的に集団や集団間での儀礼行為に伴って行われる歌や踊りを指し、①踊り、②呪文、歌、吟唱、儀礼的聖歌、③体を揺り動かす、揺り振る動作等を含む一連の動作体系とする意見もある(畑中一九八九)。二〇〇二年度の調査では、マウントハーゲンショーやアサロ溪谷のマッドマンショー、訪問した村で行われたシンシンについて報告した(高橋ほか二〇〇三)。以下、今回実見したシンシンについて記述する。

シンシンに先立って、ハウスタンバランスの中央には被り面が置かれていた(図7-5)。被り面は円錐形を呈し、植物質の材料で作られていた。その頂点には大きな羽飾りと仮面が据えられ、下部には足元まで覆う腰蓑が付けられていた。腰蓑の上端には黄色い果実が一列巡っていた。被り面には、同様の形状の四つの大きな仮面が四方に向けて取り付けられ、さらに異なる形状の楕円形の小さな仮面が正面に一つ取り付けられていた。被り面に取り付けられた

五つの仮面は、それぞれ異なるクランに属する精霊を表し、総じて「イナ」と呼ばれる。それらの精霊はヤムの収穫に際する儀礼の折に召命される。ヤムの収穫に際するシンシンは、本来年に一回、収穫期である一二月から翌一月にかけて行われているという。

ハウスタンバランス内には丸木をくり抜いて作られた四mほどのスリットゴングが四本置かれ、男たちがそれらを叩きながら歌い始めると、シンシンが始まった。次いで、被り面がスリットゴングのリズムに合わせて揺り動き、その仕草はあたかも被り面が生きているかのようなのである。被り面が動き始めたのち、伝統的な衣装を身に着けボディペインティングを施した男女がハウスタンバランスの中に入り、被り面を取り囲んで歌い踊った。

ハウスタンバランスの中央で歌い踊り始めた一団は、ハウスタンバランスの前面にある広場へ向かい徐々に移動した(図7-6)。男性は槍または小鼓を持ち、女性は竹を骨組みとした扇状の編物を持って踊っていた。参加者は主に壮年から中年期の男女だが、若い女性も見られた。歌は、一人が独唱し、そのあとを追って一団が合唱する形をとっていた。独唱するのは基本的に男性だが、稀に老齢の女性が歌う場合もあった。これらの歌や踊りには、精霊に対する感謝や豊穡祈願、あるいは祖先への敬意が込められている

という。一団は広場で四〇分ほど踊ったのち、ハウスタン
バランの中へと戻り、被り面が元の位置に安置されたところ
でシンシンが終了した。
(山崎太郎)

3 サウオス族コイワット村の調査

サウオス (Sawos) 族は、セピック川中流域に居住する
主要な部族のひとつである。セピック川北岸の内陸部に展
開し、東にアベラム (Abelam) 族、川を隔てた南方にイ
アトウムル (Iatmul) 族とそれぞれ隣接する。今回の調査
対象であるコイワット村は、アンブテイからモーターカ
ヌーでセツピク川を下って四時間半、さらに船着き場のチ
ンブンケ (Timbunke) から車で一時間弱内陸に入った平
原に位置している。

コイワット村は現在、No.1からNo.4の四つに分村してお
り、村全体で二千人ほどの人口を抱えている。分村の順
序は、まずNo.1村が分村してNo.2村が作られ、それ以降No.
1村を母村にNo.3村が、No.2村を母村にNo.4村がそれぞれ
作られている。各村の地理的な距離は、おおよそ徒歩三十
分圏内である。母村と分村の間の人の流れは比較的明瞭
で、我々調査隊がベースキャンプを提供いただいたNo.3村
の村民は、その多くがNo.1村から移住した人々であった。

早稲田大学考古学研究室では、これまでにサウオス族を
対象とした土器づくり調査を実施しておらず、したがって
今回が初めての現地調査となった。調査内容は、後述する
カマナの製作工程の実見や土器にまつわる聞き取り調査を
中心に、時間の許す限りコイワット村のクランやトーテ
ム、またハウスタンバランでの儀礼の様子等に関する聞き
取りを行った。以下では尖底鉢カマナの製作工程を中心に
概要をまとめることとし、その他の調査成果は別稿をもつ
て詳述する。

(1) コイワット村の土器づくりについて

コイワット村は、南東に隣り合うカマンガウイ (Kamang-
gai) 村と並び、サウオス族の土器づくり村として知られ
ている。⁽⁴⁾ とりわけ「カマナ」(Kamana) と呼ばれる優美
な陰刻文様を施した尖底鉢は、かつてはサウオス族の主要
な生産品で、河川の動物質食料に乏しい内陸の村々にとり
食料を得るための重要な交換財となっていた(福本一九九
四a)。また一方、カマナの装飾的価値は周辺部族に広く
受容され、日常什器の一つとして部族を越えた利用がなさ
れていた。カマナはさらに、セピック川流域にとどまら
ず、今日でも土産物として首都ポートモレスビーで店頭
に並ぶほか、旧宗主国であるドイツやオーストラリアを中心

にインターネットで販売されることもある。

このように、広く装飾的価値が知られた土器づくりを行うコイワット村であるが、その既往研究は意外にも少ない。メイとタクソンは、パプアニューギニアの土器研究の一環としてコイワット村のカマナの製作工程を紹介しており (May and Tuckson 一九八二)、現地調査に基づいたものとしてはこれがほぼ唯一の先行研究である。日本においては、今泉隆平氏がタンバナム (Tambanam) で収集したカマナのコレクションが紹介されているほか (塩沢町立今泉博物館一九九五)⁵⁾、福本繁樹氏がカマンガヴィ村の土器製作を紹介する中でサウォス族の土器づくり村として触れているのみである (福本一九九四b)。

さて、右記の先行研究で指摘されるコイワット村の土器づくりの特徴は、大きく以下の二点に集約される。第一に、男性が土器づくりに参画する点である。ただし参画の仕方はミノ村と異なり、女性が成形した土器を男性が施文するという工程をとる。これはセピック川中流域に一般的な製作工程で、土器文様の持つ社会的価値を示す好例と言える。第二に、個々の文様の意味と部族トートテムとの関わりが挙げられる。カマナの文様は具象文から幾何学文まで多様なバリエーションが存在し、それらは動植物や自然現象、また精霊を示すとされている。その多くがトートテムを

表現するという指摘の一方で、サウォス族の基本的な社会思想や親族組織に関しては未だ情報が少なく、サウォス族社会における土器文様の相対的位置づけを明らかにすることが喫緊の課題と言える。

①カマナの製作工程について

今回の調査では、女性三名と男性二名による土器製作を
実見する機会を得た。土器製作に用いる粘土はすでに村内
に用意されており、灰色粘土と赤褐色粘土の二種類が乾燥
したサゴヤシの樹皮に包まれた状態で高床家屋の床下に保
管されていた。粘土採取地はそれぞれ異なるものの、灰色
が村周辺のブッシュ、赤褐色がNo.1村の一角と、いずれも
村の近隣で入手可能とのことであった。カマナには灰色粘
土が用いられ、赤褐色粘土はリングアウ (lingau) と呼
ばれる一般的な調理用鉢の製作に用いられる。

図8は今回の調査で製作されたカマナ二個体で、完成後
に製作者より調査隊へ寄贈いただいた。1は三〇代の製作
者によるコウモリを主文様とした土器、2は五〇代の製作
者によるストリングバッグを主文様とした土器である。以
下、カマナの成形・整形工程をみていきたい。

成形 粘土塊から長さ一五cmほどの粘土紐の元を数本つく
り、バナナの葉の上に置く。それを木の板の上で転がし、

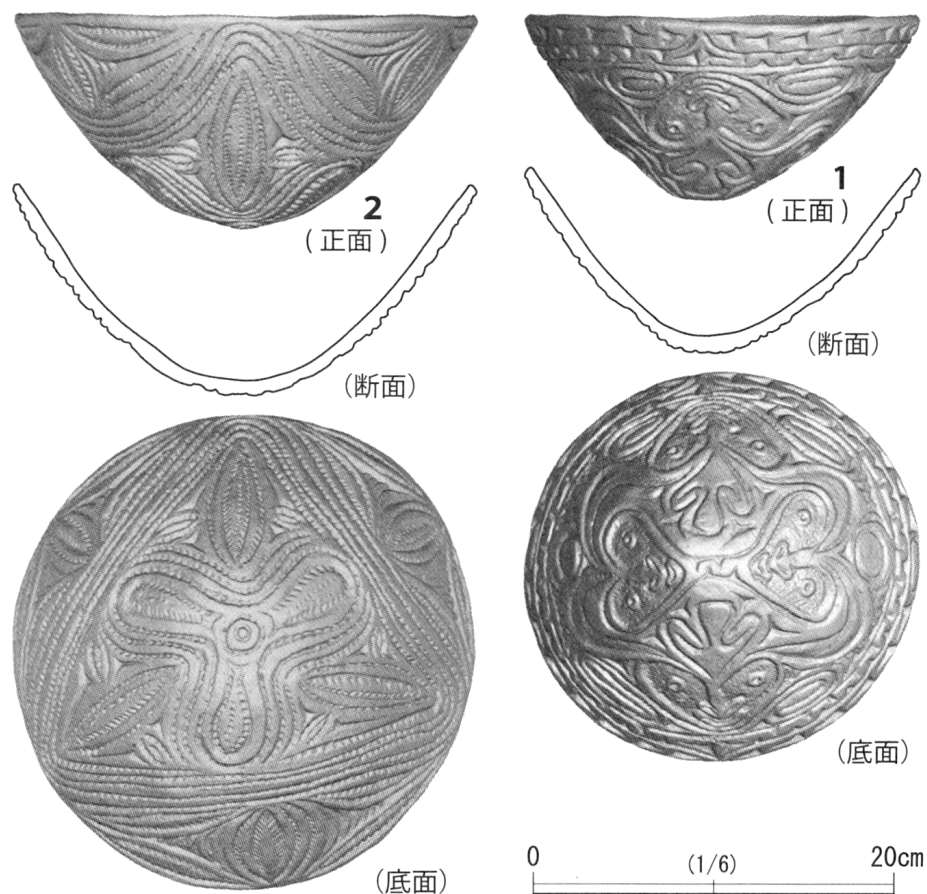


図8 今次調査で製作されたカマナ

親指で内面のみ輪積み痕を潰していく(図9-13)。粘土紐を一五段ほど輪積みして目的の器高に達すると、指先の腹で下方から上方へ輪積み痕を消しながら外面調整を行う(図9-14)。

整形 二枚貝の貝殻腹面を器面に対して横方向に沿わせ、内面↓外面の順序でケズリを施す(図9-15)。最後に、水をつけた人差指の内側面で土器内面を平滑にし、口唇部を貝殻腹縁でケズリながら平縁に仕上げていく(図9-16)。このとき口唇部に凹凸がある場合は、粘土を少しずつ継ぎ足しながら調整する。

以上がカマナの成形・整形工程で、ここまでの作業時間は約二時間、作業はすべて女性により行われた。作業中は随時粘土のメンテナンスを行っており、先述した木槌で叩く行為以外にも、粘土の中に混入している砂・ゴミ、また工具についた粘土を丹念に取り去る、木の板についた粘土を貝製の工具で剥ぎとる、さらに輪積み中は外面に水をつけて乾燥しないように気を遣うなど、異物の混入に細心の注意を払っている様子が窺えた。次に、文様の施文以降の工程をみていく。

文様下書き 整形が終了すると間もなく、男性が文様の下書きを行う(図9-17)。「ウイロガ」と呼ばれるサゴヤシの葉脈で作られた幅8mm×長さ一五cmほどの細長い篋状工

径1.5cm程度の粘土紐を作出、巻き上げ法で底部を作る(図9-12)。このとき粘土紐に粘性が足りず亀裂が生じる場合、粘土塊に水を足しながら木槌で叩く(図9-11)。次に粘土紐を円周の四分の三ぐらいずつ輪積みしていき、



1. 木槌で粘土を叩く



2. 巻き上げで底部作出



3. 内面を潰しつつ輪積み



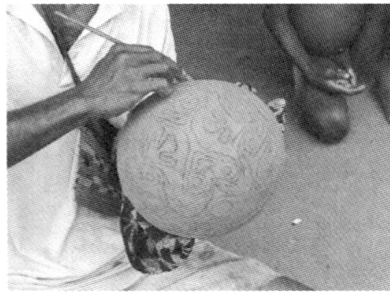
4. 外面の輪積み痕をナデ消す



5. 貝殻腹縁で内外面ケズリ



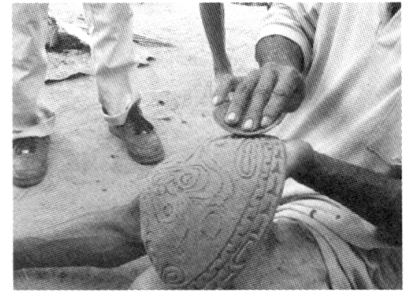
6. 指オサエで口唇部調整



7. 文様レイアウト



8. 粘土を彫去し施文



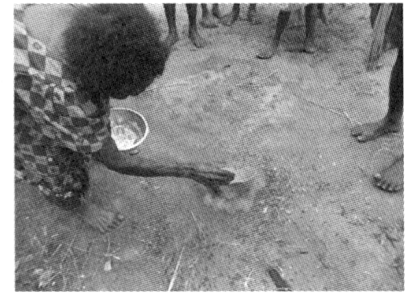
9. 随時ミガキを施す



10. 文様内に連続刺突



11. 野焼きで焼成



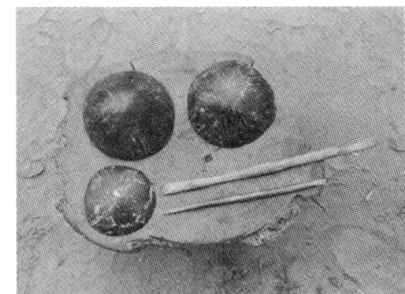
12. 焼成後すぐに水をかける



13. 彫去文様内に彩色



14. 外面全体にススで彩色



15. 主要な施文具

図9 カマナの製作工程

具(図9-15右下)を用い、二本沈線で器面に文様割付等のレイアウトを作図する。

施文 本格的な施文は、土器を一晩乾燥させた後に行われた。施文はやはりウイロガを用い、下絵に工具を沿わせて彫去する形で陰刻を施していく(図9-8)。図8-1のコウモリをモチーフとしたカマナでは、単位性や対称性を意識しつつ顔面モチーフを施文し、それと並行して三叉文や楕円文などを空白部に充填していく。施文の最中には、文様の端部にはみ出た粘土を整えたり、器面に光沢を与えたりする目的で、「コインガー」と呼ばれるココナツ殻製の工具(第9図15左上)を用いて随時外面調整が行われる(図9-9)。彫去が終了すると、最後に鉄製のウイロガによって彫去内および沈線内に連続刺突文を充填する(図9-10)⁶⁾。以上の施文作業はすべて男性が行い、所要時間は約二時間足らずであった。

焼成 丸一日の乾燥期間をおき、野焼きによりカマナを焼成する。燃料材は乾燥したサゴヤシの葉脈や樹皮で、これらを井桁状に組み、燃料材の中に土器を正位で据え置いたのち、その上を燃料材で覆って火をかける(図9-11)。全体に火が回り一五分ほどすると燃料材を取り払い、サゴヤシの葉脈二本で挟んで土器を火床から出す。取り出した直後に器面に水をふりかけ(図9-12)、焼成が完了する。

焼成作業には男女とも参画する。

彩色 土器が手で持てる温度まで冷えると、カマナ製作最後の工程である彩色に移る。顔料は四色で、まず粘土を水で溶いた赤色・黄色・白色顔料を、「タングシン」と呼ばれる竹の先端を割いたブラシで陰刻内に塗布していく(図9-13)。その後、家で日常的に使用されている鉄鍋の外面に付着したススを両手にこすりつけ、水でのばしながら器面全体にこすりつける(図9-14)。このスス由来の黒色顔料は「タルル」と呼ばれ、陰刻部分からはみ出した顔料を覆い隠し、かつ陰刻部分以外を黒色で仕上げる効果がある。以上の彩色作業は男性が行い、その所要時間は四〇分ほどであった。

②カマナに関する聞き取り調査について

上述した工程で製作されるカマナについて、最後に若干ながら村内での聞き取り内容を記しておく。

まずカマナの用途であるが、一般的には食事で、スープやこの地域の主食であるサゴ澱粉の容器として利用されている。かつてはハウスタンバランでのイニシエーション時に食料を入れる容器として利用されていたが、最後のイニシエーションが行われた二〇〇六年以降に儀礼の場で使用されたことはないという。

また、そもそもコイワット村におけるカマナの製作目的は、自家消費もさることながら、周辺部族への売買やプレゼントを主体としている。土器の売買は、二〜三年周期で地域的なバイヤーが来村して直接買い付け、そのバイヤーが他地域に販売する仕組みである。しかし一九九七年以降はバイヤーが訪れず、したがって定期的な土器製作はここ二〇年ほど行われていないという。

しかしながら、このように伝統的な土器製作システムが日を追って減衰する一方で、今日においても製作者それぞれが高い製作技術を保持していることは印象的であった。また驚くべきことに、今回実見したカマナ製作者を対象とした親族調査によれば、男女を問わず一〇代後半の家族はほぼ全員が土器の製作と施文を行うことができ、それはコイワット村の人々全体に共通することである。土器づくりは母が娘に成形・整形を、父が息子に施文・彩色を教えることが普通で、村内で卓越した技術を持つ個人はおらず、おしなべて同水準のカマナを製作できるといえる。このように、土器の社会的意義の変化と実際の物質文化の変化とが必ずしも一致しないという現象は興味深い。今後の調査ではこの点をさらに掘り下げ、土器と社会との関係性への理解を深めていく必要がある。（大網信良）

おわりに

今回の調査は、セピク川中流域の二つの部族、すなわちクウォマ族とサウォス族の土器づくりに関する報告を行った。二〇一一年の調査では、クウォマ族ミノ村における土器製作が著しく儀礼と関係することを明らかにし、アパウなどはヤム儀礼での使用を前提に製作するために、クウォマ族内部の社会編成と関わり、イエナ階層、ミンジャ階層、ノグイ階層という男子階層組織の中で、最高位のノグイ階層の、しかもクラワ・克蘭の男子しか製作に関与できないことを報告した。それ以外の男子成員は土器づくりに参加できないし、また仮に作っても機能を果たしえないと信じられている。今回の調査では、土器の表面を飾る文様の実態を明らかにすることができた。アウマルの文様は人の顔などは判別できるが、それ以外は相当にデフォルメされており、具体的なモチーフは俄かに解明できない。今回の調査では製作者に対する直接の聞き取りにより、「トリの静脈」とか「蝶々の卵」などという、実際の文様からは予想すらできない意味を聞き出すことができた。それといわれても、その理由が思いつかないほど、実際の文様内容と乖離しており、どこに実態があるのかわからないほど

であった。製作者本人しか理解できないのではないかと思われる。今回の調査では実際にアウマルの製作過程と文様の意味内容について記録にとどめることができた。

その実態は昔からの慣習的な製作過程をとどめていると考えられる。かつての土器文様と同じ文様が施文されていることは過去の調査報告と比較しても明らかである。実態を離れても、なお正確に文様を描くことができるのは、今日の生産体制の中で、昔以上に製作する回数が増し、毎日のように反復する機会が増えたためであると考えられる。今回もミノ村のN氏への聞き取りで、父親から一八歳のころにアパウの製作技術について習ったといっている。それでは、ノグイ階層になって初めてアパウの製作が許されるとした従来の結果は修正せざるを得ない。

サウォス族のコイワット村では、カマナの土器製作について情報を収集できた。この地域の調査は我々としても初めてのことであった。伝統的な素焼土器の成形、施文、塗彩などの工程を細かく記録できた。

しかし、コイワット村の土器製作は日常的な儀礼や家庭で使用するというものではなく、すでに美術品としての外部評価に基づいて、半ば土産品として販売することを目的としていることが理解された。近年でもそれらを買付けに来るディーラーがいたことを証言として得ており、その

点において本来の日常的使用からすでに遠のいた姿を観察したことになる。彼らの倉庫の棚中に、売れるのを待って並べられているのを観察することができた。換言すれば、いずれ売れることを期待して、作り置きしているわけである。そのために製作過程や器種、器形、文様、彩色が昔のものと比較してどの程度変わってしまったのか、現在のところ見極めることはできないが、将来的には欧米に渡った初期の頃の土器と比較することによって解明することができるであろう。

今回の研究で付言したいのは、紹介した二つの村々で製作される素焼き土器は、すでに宗教生活の場で使うコンテクストを離れて、観光用の土産販売を目的とするものに変わっている点である。製作目的が変わってしまった以上、私たちの初期の研究目的と乖離しており、その点で成果を本来の目的に直接反映することは困難である。文様内容や器の形態、規模などにはさして大きな変化はないものの、それを秘匿してきた社会的コンテクストは失われ大きく変化している。特に近代化の進展に伴い、ヤム儀礼は本来の姿を変え、もはや昔日の姿を留めていない。本来であれば外部の人間には絶対に秘密とされ、内部の集団に対しても秘匿されてきたアパウ、ワサウ、アウマルの製作過程を外部に漏らすことなどあり得ないことだし、文様の意味

内容を外部に伝えることなどありえないはずである。変革するパプアニューギニアのセピク川流域で、秘匿するための内部規程のブレーキが緩和され、幾分弛緩した今日の状況の中で私たちの調査は進展したわけである。しかし、土器文様の意味内容が昔と変わってしまったわけではないことは明白である。またそれらを製作する手順が変わってしまったわけでもない。大体において、それらは過去の慣習を忠実に踏襲したものであることに変わりはない。その意味で、私たちの研究は縄文時代の土器製作や型式の成立に関して、民族誌のデータをそのままの形で利用することはできないものの、利用できる部分とできない部分の切り分けを明確にすることで、今日における民族誌調査の意義を高めることができる。理論的研究が要請される所以である。

本研究は学振の科学研究費（挑戦的萌芽研究、研究代表者・高橋龍三郎、課題番号26580139）に基づくものであり、また鹿島研究振興財団からの研究助成を受けた。明記して謝意を表したい。
（高橋龍三郎）

註

- (1) 現地語で「丘陵の民 (*kuow: hill, ma: people*)」の意
- (2) ピジン語で「精霊の家 (*houz: house, tambaran: spirit*)」の意
- (3) 図3および後述する図8の土器図版は、CREAFORM社製3DスキャナーのExscanを用いて土器を三次元計測し、3D Systems社製編集ソフトのGeomagic Controlを用いて採取した三次元情報を編集・統合したものである。
- (4) 聞き取り調査によれば、コイワットNo.4村はカマンガヴィ村に隣接しているという。
- (5) 資料解説では、製作地としてコイワット村とカマンガヴィ村が併記されている。
- (6) 二個体のカマナの施文を同時に観察したが、もう一方の年長の製作者が連続刺突に用いたのはサゴヤシ製のワイロガであった。

引用・参考文献

- 塩沢町立今泉博物館編 一九九五『パプアニューギニアの土器と土製品 収蔵品目録I』
- 高橋龍三郎・細谷葵 二〇〇四「パプアニューギニアの生業に関する民族調査―とくに土器製作、農耕活動の側面について―」『考古学からみた社会の複雑化 研究報告集』早稲田大学シルクロード研究所・早稲田大学比較考古学研究所・早稲田大学先史古代研究所編 二〇五―二三二頁
- 高橋龍三郎・細谷葵・井出浩正

二〇〇三「パプア・ニューギニアにおける民族考古学的調査」『史観』第一四九冊 七三―九〇頁

二〇〇五「パプアニューギニアにおける民族・考古学的調査報告(二)―セピク河中流域の現地調査の報告―」『史観』

第一五二冊 早稲田大学史学会編 八七―一三頁

高橋龍三郎・中門亮太・平原信崇・岩井聖吾 二〇一三「パプアニューギニアにおける民族考古学的調査(九)―クウォマ族の総合調査―」『史観』第一六八冊 早稲田大学史学会編 一〇三―一二〇頁

豊田由貴夫

一九九七「パプアニューギニア、セピク地域における農業開発実施上の文化的・社会的課題」『熱帯農業』四一(一)

二〇〇三「パプアニューギニア、セピク地域における多品種栽培の論理」吉田集而ほか編『イモとヒト 人類の生存を支えた根栽農耕』平凡社

畑中幸子 一九八九「パプアの歴史と風土」天理大学、天理教道友会編『パプアニューギニア―ひとものこころ・天理大学付属天理参考館所蔵・第三期第一巻―』天理教道友会

平原信崇・岩井聖吾 二〇一二「二〇一一年度セピク川流域における民族考古学的調査―儀礼と組織―」『三大学公開シンポジウム―パプアニューギニア民族誌から探る縄文社会―発表要旨集―』早稲田大学考古学研究室 三五―四二頁

福本繁樹

一九九四a「男性が作る土器」『季刊民族学』六九号 国立民族学博物館監修 二六―四〇頁

パプアニューギニアにおける民族考古学的調査(一二)

一九九四b「精霊と土と炎―南太平洋の土器―」東京美術

堀田満 二〇〇三「根栽農耕で利用される「イモ型」植物」吉

田集而ほか編『イモとヒト 人類の生存を支えた根栽農耕』平凡社

May, P. & M. Tuckson 1982 *The Traditional Pottery of Papua New Guinea*. University of Hawaii Press